

## ローマ帝国

フォロ＝ロマーノ

ローマ旧市（フォロ＝ロマーノ）遺跡。遠景はパラティヌスの丘。元老院議員たちの屋敷街があった。右下にバシリカ＝ユリアの遺構が見える。この石段に立ってカエサルが、オクタヴィアヌスが演説した。

### ●ユダヤ教からキリスト教へ

ローマ帝国の属州ユダヤで、皇帝ティベリウスの代、紀元 30 年ごろ、イエスという男が反逆者として処刑された。ヘブライ人の宗教ユダヤ教では、救世主（メシア）の到来が予言されていた。かれはメシアを称し、ユダヤ教の偏狭な民族主義（選民思想）を批判して、排斥されたのである。かれとその 12 人の追従者（使徒）に始まる宗教をキリスト教と呼ぶ。キリストはギリシア語でメシアと同じ意味である。

キリスト教の信者は皇帝権力の限界を指摘し、皇帝を神格化する皇帝崇拝を認めなかった。紀元 64 年ネロ帝の迫害を皮切りに、紀元 303～05 年ディオクレティアヌス帝の大迫害にいたるまで弾圧された。それにもかかわらず、信者の数が増大してやまかったのは、キリスト教の思想がローマ人のストア哲学に代表される世界市民主義と同調したからであり、また愛と救済の思想が貧民の共感を誘ったからであった。

紀元前 1 世紀、ローマの支配は地中海全域をおおい、さらにガリア（ヨーロッパ）内陸にまで及んだ。ラテン語と道路がローマ的世界を均質化する仕掛けであった。共和制の伝統は合議制の元老院を隠れ家とし、元首制という呼称が専制的支配の実相をさりげなくとりつくろっていた。奴隷とキリスト教徒は愛と救済の約束に頼りすぎ、爆発する都市民衆は“パンと見世物”を要求する権利を放棄しようとはしなかった。

- 272 イタリア半島を統一
- 264 第 1 次ポエニ戦争 ～241
- 218 第 2 次ポエニ戦争 ～201
- 149 第 3 次ポエニ戦争 ～146
- 133 グラックス兄弟の改革 ～121
- 73 スパルタクスの乱 ～71
- 60 第 1 回三頭政治 ～46
- 46 カエサル独裁の時代 ～44
- 44 第 2 回三頭政治
- 31 アクティウムの海戦
- 27 元首制の成立

- 30 イエス処刑
- 54 ネロの時代 ~68
- 96 五賢帝の時代 ~180
- 116 領域が最大に達する
- 235 軍人事皇帝の時代 ~284
- 284 ディオクレティアヌス帝 ~305
- 313 キリスト教を公認
- 330 コンスタンティノーブル遷都
- 392 キリスト教を国教とする
- 395 帝国、東西に分裂

## 1. 共和制ローマ

紀元前 1000 年ごろ、ラテン人をはじめイタリア語族系の集団がイタリアに南下し、その直後、小アジア方面からエトルリア人が入って北イタリアに分布した。次いで紀元前 8 世紀以降、ギリシア人が南イタリアに植民地を作り始める。やがて、中部イタリアのティベル川沿いの丘陵地帯“七つの丘”に定着したラテン人とサビニ人が協力してローマという都市国家を作った。伝説では紀元前 8 世紀なかばとされるが、おそらく前 6 世紀はじめのころであった。ローマという呼び名は、伝説の建国の祖ロムルスの名から出ている。

伝説では七人の王が続いた。エトルリア人の干渉を受けたらしく、最後の三代の王はエトルリア人であったという。紀元前 6 世紀末、ローマ人はエトルリア人の王を追放して共和制に入った。すでに貴族と平民、それに奴隷と社会的階層分化が進んでいて、はじめは貴族優位だった。市民権は貴族に限定され、元老院という貴族の会議体が最高の国政機関であった。民会の権限はせまかった。

そこで、はじめ 2 世紀間はいわゆる身分闘争時代であって、その間、護民官が置かれ、十二表法が制定されるなど、身分間格差を埋める努力が払われ、ついに紀元前 287 年のホルテンシウス法が全官職を平民に解放し、民会は決議は元老院の承認がなくとも国法と認められると規定したとき、身分闘争は終わったのである。

この間、ギリシアの場合と同様、中小土地保有農民による武装自弁の重装歩兵制の普及という戦術の変化が、身分闘争において平民に有利に働いた。そうしてまた、この重装歩兵制の普及は、ローマのイタリア統一と地中海上への進出という動きと密接に関わっていたのである。

イタリア半島の支配は、紀元前 272 年の南イタリアのギリシア人がポリス中、最後まで抵抗したタレントゥム（ギリシア名タラス）の帰順によって完了した。ローマ人の征服戦争の次のページはポエニ戦争の章である。ポエニ（フェニキア）人のポリス、カルタゴに対するローマ人の執ような攻撃は、紀元前 146 年、カルタゴの徹底的な破壊とカ

ルタゴ人の皆殺しによって完了した。

この戦争の過程でローマはシチリア、ヒスパニア、カルタゴ本領（アフリカと改称）を獲得した。前後してマケドニア、ヘラス（ギリシア）、さらに小アジアのペルガモンを支配した。これらの海外領土を属州（プロウィンキア）として総督を置き、徴税請負人を定めて税を課した。

都市国家から領土国家への展開は、ローマ人社会に大きな変化を与えた。属州での大農地経営（ラティフンディウム）がイタリア本土の自由小農民の没落を促し、無産市民の大量発生と都市への流入、属州における奴隷の反乱（その最大規模のものがシチリア島における、紀元前73～71年のスパルタクスの乱）が社会不安を醸成した。

グラックス兄弟による改革も効果なく、ローマ社会は紀元前1世紀の“内乱の一世紀”を迎える。属州総督職を独占する元老院の閥族派。平民会を政争の具とする平民派。そうした旧来の貴族層に加えて、属州の徴税請負業に群がる新興の平民上層の“騎士階級”。これら諸支配層がそれぞれの頭目を押し立てて争う。

かれら党派の頭領たちは、建前では、あるいは執政官（コンスル）、あるいは元来は非常時に選出される独裁官（ディクタトル）として行動する。これらは本来任期のある官職であったが、軍隊を掌握した閥族派のスラが死ぬまで独裁官職にあったこと、やがて平民派のカエサルが終身独裁官の地位に推されたことからわかるように、共和制の政治機構の形を借りた、これは政権争奪闘争であった。

## 2. ローマ帝国

平民派の頭目カエサルは閥族派のポンペイウスらといわゆる三頭政治体制を組んだが、ガリア征服後、ポンペイウスと対立して、これらを倒して独裁的地位についた。これを共和制の否定と見たブルートゥスら元老院議員のクーデタは、紀元前44年カエサルを殺害したが、養子オクタヴィアヌスはその跡を襲い、新たにアントニウスらと三頭政治を組んだ。そうして、東方の統治を分担したアントニウスがエジプトのプトレマイオス朝の女王クレオパトラと同盟を組んだと見るや、紀元前27年、アクティウム沖の海戦にこれを倒し、クレオパトラをも自害に追い込んで、エジプトを属州とし、ここに地中海全域の支配を完了した。

オクタヴィアヌスは、いまや“内乱の一世紀”をひとり脱け出したチャンピオンであり、平和と秩序の回復者である。元老院は彼にアウグストゥス（尊厳なるもの）の称号をあたえて、その功に報いた。共和制の機構はそのまま存続したが、終身護民官職、軍隊最高指揮権など、各種権限が彼に集中した。インペラトール（皇帝）の称号は、これは元来軍隊指揮者の称号であって、軍隊最高指揮官としての権限に由来する呼称である。しかし、かれはプリンケプス（市民中第一席、元首）の称号を好んだので、この政体をプリンキパトゥス（元首制）と呼ぶ。

ローマ帝国の経営は属州、軍隊、都市を三つの基本とした。2世紀初頭、トラヤヌス帝

の代にダキアが属州とされて、これで帝国の領土は最大となった。それら属州においては徴税請負制が廃止され、俸給官僚による公正な税の査定と徴収、属州への税金の還元と住民の福祉への配慮が心掛けられた。軍隊は属州に駐屯する軍団、首都と皇帝を守る近衛軍、そうして遊軍としての補助軍にわけられる。アウグストゥスは、皇帝直轄の属州からの収益を使って 30 万の軍隊を維持したという。2 世紀のトラヤヌス帝の次のハドリアヌス帝の代以後、属州の軍団は現地徴募を主とするようになる。これは軍団の在地的性格を強める。3 世紀の“軍人皇帝の時代”がここに用意されたのである。

属州に“ローマ道”が走り、都市が数珠玉のように連なる。帝国の血脈であり、リンパ節である。都市は軍団とともに巨大な消費市場であり、ローマ市にならって公共施設が設けられ、都市生活が営まれた。トラヤヌス帝以後、ローマ市民権拡大の政策がとられ、都市民の多くはローマ市民と同等の資格を持つようになった。

これは都市生活の、いわば地方化傾向を促進したと考えてよいだろう。同様に、いやなおのこと、産業と商業の座としての都市ということを考えても、そのことはいえる。地中海商業圏の枠を越えて、東方貿易に、北大西洋の商業圏との取り引きに都市の活力は向かう。帝政初期には商工業の中心はいぜんイタリアにあった。それがしだいに地方に移動する。たとえばガリア北部、現在のベルギーのあたりである。いわゆる経済の遠心化傾向が進んだのである。

### 3. ローマ帝国の衰退

ネルヴァに始まる、いわゆる 5 賢帝の最後アルクス＝アウレリウス帝をもって帝政ローマの安定期、いわゆる“ローマの平和”は終わる。3 世紀、属州軍団の擁立する皇帝が乱立し（軍人皇帝時代）、くわえて東方にはササン朝ペルシア、北方にはゲルマン人の脅威があった。ディオクレティアヌス帝の専制君主制（ドミナートゥス）も、これを受け継いだコンスタンティヌス帝のコンスタンティノーブル遷都とキリスト教の公認といった大胆な諸政策も、帝国の衰運を食い止めることはできなかった。

求心力が減退しつつあったということである。経済の遠心化傾向は農業にもはっきり現われていた。ローマ社会の農業の基幹であった奴隷制大土地経営（ラティフンディウム）がしだいに解体しはじめるのも 3 世紀以降のことである。大農園（ラティフンディア）で生産される単一商品作物の取り引きが困難になってきたこと、奴隷の供給源が枯渇してきたことなどが理由である。

かわって隆盛したのがコロヌス制である。これは自由土地保有農民が小作人化し大土地所有者に従属するもので、大土地所有者は小作農民の納税義務を肩代わりするかわりに労働力が保証される。奴隷制大土地経営の奴隷も、しだいにコロヌス（土地着き小作人）の身分を獲得していった。中世的農民のタイプのはじめである。

こうしてローマ帝国は、おもむろに解体していった。コンスタンティヌス帝以後、ドナウ川とライン川はもはやゲルマン人に対する防壁ではなくなっていた。コロヌスとして、

軍団の傭兵として、かれらの領内移住はもはや日常的光景と化していた。帝政府はコンスタンティノープルを拠点として東方領土の確保を目標に定めつつあった。かくして 4 世紀の末、テオドシウス帝の死後、帝国が東西に分かれたとき、西ローマ帝国の滅亡はすでに予定されていたのである。